

互いに学び合う授業の創造

[校内研修研究テーマ]

～ 聴き合い・かかわり合い・支え合う授業づくりを通して ～

與那嶺昭校長が授業改革の声を上げて1年。私も今年度3度目の訪問となる。年度末に向けて職員も多忙の中、校内研修における全教室公開の校長決断に敬意を表したい。さて、写真①、今年度はじめ改革に向かって職員がどんな職員室を



写真①

望んでいるか？写真②、どんな子供たちを育てたいと願っているかをまず共有することが大切である。とお話させていただいた。どうでしょうか？「職員のベクトルが共有されないが一番困るのは子ども達ですよ。」改革の1年目、改革の様々な課題や、困難が見えてきたのではないのでしょうか。本日はすべての教室を参観させていただき感謝につきます。



写真②

[1年] 1組「おなじ かすずつ」 : 2組「お手がみ」

1年生の難しさがある。発達段階の差が顕著に見えている。本人たちは当然まったく悪気なし、私たち教師の指導や言葉が全く届いてくれない個性の強い子ども達がいる。



まじめでちゃんとさせたがる教師ほど個性の強い子に、いらだちやストレスを感じ疲れてしまう。割り切って受け入れて付き合っていくしかないのではないだろうか。おそらくお家の方でも保護者も手を焼いているのではないかと想像できます。未来や社会は共生と共存の世界です。この達なりに社会とのかかわりを作り出して行くのです。大切なことはその子なりにという「個性」を理解してあげることだと思います。焦らずにじっくりと子どもの個性と成長に寄り添ってあげて下さい。決してやってはいけないことがあります、それは教師の指導上の都合による「排除」です。可能な限り仲間と一緒に育ててあげてください。



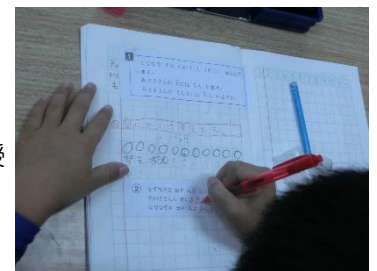
低学年ではグループよりやはりペア活動です。算数ブロックを出して、隣の仲間と勝手に8つを2つずつ分けて説明し合っていました。しかもしっとりボソボソとした「聴き合い」が成立している。低学年の時に協同活動や「分からないことは友だちに訊く」の習慣を身につけさせておくことは、この子達の今後や授業づくりにおける先生方の手助けになることは間違いありません。

[2年1組] 何番目? : ずにかいて考えよう。

【授業者より】児童の「声に耳を傾け、」「つぶやき」をつなぎ、躓きを感じたら教科書や課題にもどすように心がけ、子ども達の学びをサポートしていきたいと思います。待つこと、しゃべりすぎないことを意識して頑張ります。・・・素敵な授業者の声ですね、謙虚に授業と子ども達に向かう授業者の姿が思い浮かびます。



さて、算数の授業で今一番大切にされていることはなんですか？題意をしっかりとおさえ、問いに対する解を合理的に立式し、答えを導き出す計算方式を提案することですか・・・難しい？



「学び合う」算数において大切にされなければいけないことは、解答の仕方ではなく問いや課題に対する、解決に至る多様なプロセスの中のそれぞれ個人が提案する『考え方』を共有することです。文科省が提案する「多様性の受け入れ」や、「プロセスの中の学び」とは、まさに今日の2年生が実践されていることなのです。ちなみに秋田の学びは「解答の仕方ではなく」「解決に至る考え方」を学び合うことと定義しています。下の3枚の写真、「分からない」をきき合い、仲間の困り感に寄り添う仲間です。授業の中で「なんで?」「どうして?」の声が聞こえた瞬間が主体的探求型の学びの始まりなのです。

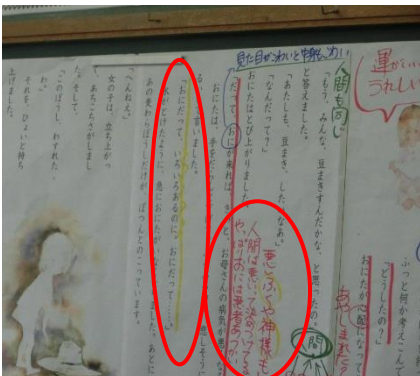
右の3枚の写真をぜひ今帰仁小の先生方で学び合いが成立しているイメージとして共有してほしいです。



【3年2組】 おにたのぼうし：消えてしまった おにたについて考える。



あまんぎみこ、人間の偏見を突き刺す代表作である。おにたの「ぼうしの意味」、「おにた消滅の意味」。日本人の道徳的精神の伝達は素晴らしいと私は考えている。「人間だれしも持ちえる勝手な思い込み（偏った見方）＝偏見。」等を文学や「お話（日本昔話等）」で突き刺し考えさせてくれる。先人の伝授の方式の知恵深さに敬服する。さて、本時の授業はどうであっただろうか、私は数分しか参観できなかったが、グループでの「きき合い」は下の写真の通り成立していた。あとは交わされる対話の中身（学びの質）を見ることである。



「おににもいろいろあるし、人間にだっていろいろな人がいる…だけど女の子は… おにたは…」赤いパーカーの男の子の言葉である。まったく同じ対話が安波小学校でも発生した。

「先生、学び合う空気はできています。もう少し子ども達の声を一一人ひとり聴いてあげてください。みんなが一斉に話だし言葉が重なって消されてしまう大切な言葉があったりします。そのために」



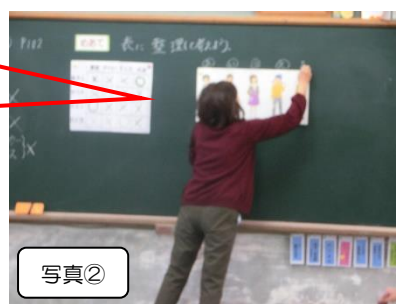
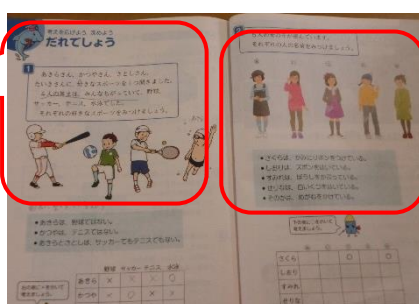
『きき合う』姿勢をみんなで確認しましょう。学び合う授業づくりで徹底して指導してほしいことは3点だけです。

- 一、「きき合う」・・・学び合う教室の基礎基本です。聴いてあげることの意義が個の尊厳です。
 - 二、「分からなければ友達に訊く。」・・・仲間や周囲に依存して自分で自分の道を拓かせる。
 - 三、「きかれたら一緒に考えてあげる。」・・・互惠関係の構築。弱者の底上げ。思いやりの醸成。
- 授業改革は、教師の力だけでは絶対に不可能です。教室の子ども達の力を信じて子ども達の支え合いに教師が依存することが大切です。 ※「深い学び」は対話的学びの中で多く発生する。

【4年1組】 だれでしょう



写真①



写真②

本時のねらい：問題の条件を用いて整理し、それをもとに筋道を立てて考え、順序よく推理して問題を解くことができる。

教科書の問題を取り上げての日常の授業である。これでいい、授業研究は身構えた当日のみの授業ではなく、授業者が日常的に実践している授業内容が一番の研究になる。教科書の左ページの問題を共有課題とし、右ページの問題をジャンプ課題的な設定としている。算数の授業においてはその単元や学習内容に応じたジャンプ課題の設定をすすめるが、教科書によっては、十分に子ども達の学ぶ必然性をつくってくれる問題も多々ある。写真①、基本的な見方や考え方の思考を共有する。できれば問題文まで提示し、題意のとらえ方や条件の見つけ方までこの基本問題で共有したかった。国語科の文学教材という大型教科書の役割を持たせたいところである。女の子は、実に的確な自分の言葉で説明した。写真②、授業者が教科書の右ページの問題を提示する。その後グループでの解決に向かったと思われるが私は隣の教室へ移動。

授業の終末が気になったので、最終場面を参観させてもらった。おそらく指名されたグループであろう全員が前に出て、解き方を説明している様子である（下写真左）。グループでの学びは、グループの答え方をひとつにまとめる作業ではない、解決に向かう過程で「自分の分からない」を仲間に提案しながら、自分なりの解決の方法を見出すことが目的でなければならない。つまり、グループにしても個の学びとして一人ひとり違って当たり前なのである。その考えからいくと発表者もグループやグループの代表でなく、個人が指名されることが望ましいと考える。2枚目の写真、グループ発表が長引いて退屈してきて聞かされる側になってしまった他者達。子どもは正直ですね、自分たちの心境を思いっきり身体表現します。この仕草を見取れる力が授業者に必要となるのです。うれしいのはR先生がすかさずケアに入り、グループ



で向き合うように授業をデザインしたことでした。
…発表（共有）の意義って何？

[5年1組 道徳の時間] 情報社会に生きる私たち（情報モラル）

今回の訪問で、一番に子ども達と教師の変容を感じた学年である。

右の写真は、1組でメールの返信をグループで作成しているところ。まさに今日の課題である。相手に気遣い、受信相手が嫌な気持ちにならないよう言葉を吟味する。一文をグループで作成するという作業だが言葉一つ決めるにしても、それぞれの



の仲間に多様な学びがある。上の写真の子ども達の寄り添いを見てほしい、教室のすべての子ども達が、実に柔らかな表情で向き合っている。一人も逃避や拒否の姿勢を示す子がいない、まさに「一人残らず」である。さらに写真ではどうしても伝えられないが、教室のやんわりとした空気を感じる。教師の表情や言葉、子ども同士の言葉、互いの関係が日常的につく出す説明しがたい空間を創造している。

実は、二学期に訪問した時この教室の変容について少しばかりの時間で担任の先生と話した覚えがあった。日々の変容は淡々とである。担任や子ども達は自然の成り行きであり気づかれていないのがふつうである。今日の訪問で見られた子ども達の表情はその変容を決定づけていた。



[5年2組 図工（鑑賞）]

このクラスも1組同様子ども達が全く違和感なく互いの言葉を「きき合っている」。そしてなによりも授業者の表情がいい、子ども達が安心して語れる空気がつく

出されている、これも1組と同じである。隣り合う教室の教師の同僚性の高まりを感じた。

デザインシートの【授業者より】抜粋させてもらう。

「自分の感じたことが他と違ったらどうしよう」と、なかなか発表に対して積極的になれない児童もいる。…改めて、「思いを伝える」ということに対して、恥ずかしいことではなく「感じ方は人それぞれ違っていいんだ」という道徳的部分にも触れながら授業をデザインしていきたい。

上記の文字から見える教師像があります。だから子ども達が穏やかで安心して向かい合っているのだですね。素敵な教室、素敵な授業、柔らかな子ども達、授業者の笑顔。「学び合う授業の結論は結局は関係づくりである。」佐藤雅彰先生の言葉を後押しする教室の事実に感謝と未来への希望を感じました。

さて、絵画、音楽、文学、等のアートのテキストで何を学ぶか？それは、各々が作品と向かい合い感じた「感性を『学び合う』こと」が大切にされなければならない。「違い」「気づき」「同じ」「なぜ」がそれぞれの学びが一人ひとりの変容と成長につながるのです。

[6年1組 算数 卒業研究]

[6年2組 道徳の時間 「難民に思いを…」]



写真左、6年1組複数の課題をグループで選択しみんなで解答していく。学び合う授業への改革の1年目の終了次期を迎える、1組は二学期提案授業のクラスである。授業者から下ろされた課題をグループみんなで解決に向かう。簡単な問題ではない互いに訊き合う「学び合い」が必然となる。左下写真、どのグループも選択した課題に食いつく。すべてのグループですべ



ての子ども達が「分かりたい」に向かう。グループの机上でちょっとの「気づき」や「なぜ」等の言葉が交わされる。子ども達が「自分の分かりたい」の解明に向かう、授業が主体的探求になった瞬間である。どのグループもじつにボソボソと遠慮なくきき合っている。授業改革1年目で確実な成果が確認できる。



右の2枚の写真、「聞かされているとき」と、「聴きたいとき」の表情が明確に出た写真である。下の写真は授業者の話が本時の授業の内容に入った瞬間である。発言者の方にわずかに身を傾け、しっかり眼を見開いて注がれる眼差し、子ども達の目力みみたいなものを感じる。「きき合う」は学びの基礎基本、大事にしたいのは教師の側の姿勢。



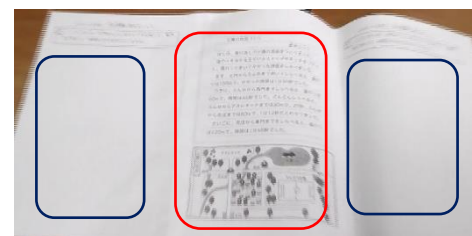
〔「学びをいかそう 読み取る算数」〕：レポートから、必要な情報を読みとり問題を解決する。



昨年の 2 月から校内研修授業づくりのモデル授業を引き受け、先生方に何度も授業を提案し同僚の学ぶ機会を提供してきた。研究主任としての職責と使命に正面から向かい合い同僚の研修の価値を高めてくれる。すべての教師のベクトルを一つに…研究主任として…。



〔共有課題〕 ワークシートの工夫



授業者は協同と対話を促進させるためにワークシートをペアで共有できるように写真左のように工夫した。シートの真ん中に問題が記され、その両脇の空間を使ってペアそれぞれが自分の考え方や解答を記していく。ペア学習や協同学習の最初の段階でよく利用される方法である。ペアでもグループでもまずは課題や仲間と向き合うことが大切である。とくに低学年のうちに「分からないことは友達ときき合う」を習慣化させたい。

〔きき合う〕 聴き合う・訊き合う。子ども達に課題が下ろされると、まずは自分で挑戦してみる。しばらくして簡単に自力で解決できないことが悟られると、自然とペアの仲間を確認しながら学びが発生し、二人の間で学びが深まり、ペアから周囲の仲間へ広がりが見られる。PISA が求めているのは解決する力ではなく「課題の解決に向かう意思と力」である。この子達は今、夢中になって、がむしゃらに自分の分らない解決に向かっていく。主体的探求の「主体」とは課題や問題を自分事として解決したい意思で動くことである。下の 3 枚の写真、子ども達に「なぜ？」が生まれ授業が主体的探求型になった瞬間である。



〔タイムマネジメント〕 さて、この 5 名の子は何が目的で何をしているんでしょう？



最初の課題の共有である。一人ひとりしっかり前に出て説明する。5 名も次から次へとつなげながら説明していった。授業者は子ども達の力で全員が納得できるようにと仕向けたのだろうか？…無理である。

ここでは基本問題なので、1～2 人の説明を教師が整理して解説してもいい、そうしないと授業が 45 分で完結することが困難になってくる。いつでも、何でも、丁寧に時間をかければいいと言うものではない、大切なのは授業全体を意識した授業者の授業デザインである。タイムマネジメントは授業づくりの基本でありその判断は授業者にゆだねられる。おそらくこの段階で授業者は後半の時間が厳しくなることが予測はできていたが・・・だと思う。

〔ジャンプ問題がつながりをつくり学びを深める〕



授業開始から 37 分過ぎジャンプ課題が下ろされた、教師の「ジャンプ課題です。」の言葉に子ども達も盛り上がった。しばらく個人で挑戦するが、やはりきき合う必然に導かれる。左写真、どのペアでもどのグループでも、互いに探究する。聴き合い支え合う姿が素晴らしい。



さて、チャイムが鳴り授業者は授業の終了を伝える。子ども達の反応を授業者や参観者は忘れないでほしい。子どもの頑張りたい意思を断ち切ってしまったのだ。右写真の男の子のものがきの跡どれほど脳に汗をかいただろう。先生が話している間もやり続けていた。



先生方お疲れ様でした。それぞれの教室がほんとにしっとりとした安心創りに向かっていました。